アルゼンチンにおける日系移民の現在と教育実践

前ブエノスアイレス日本人学校　教諭
福岡県北九州市立霧丘中学校　教諭　山　本　敬　典

キーワード　日系移民、国際理解教育、現地理解教育、多文化共生

赴任校の概要（2025年3月現在）
ブエノスアイレス日本人学校
ASOCIACIÓN CULTURAL Y EDUCATIVA JAPONESA
URL：http://jpschoolarg.wixsite.com/mysite

1 はじめに

「派遣先はアルゼンチンに決まりました」2022年12月、私が在外教育施設の派遣先を告げられ、真っ先に頭に浮かんだことは「南米…治安が悪いのでは」というネガティブなイメージだった。また、その年のワールドカップの優勝国でもあり、リオネル・メッシ選手は世界的にも有名なアルゼンチン代表のプレーヤーだったので、メッシ選手の顔が浮かんだ。この時、私の中には、アルゼンチンといえば、「日系移民」というイメージは全くなかった。しかし、実際にアルゼンチンに派遣されたのち、私の生活の中に日系移民というキーワードが大きな影響を及ぼすこととなった。のちに、日系移民に感謝の念をもつようにさえなったのだ。

それは派遣されて1週間くらい経ったときだった。慣れない勤務を終えた夕方、くたくたになりながら歩いている途中、何気なくパン屋に入った。片言のスペイン語でパンを2つ、3つ注文して、お会計を済ませると「どこからきたのですか?」と、不意に店員に聞かれた。「日本です」と返すと、何か嬉しいような様子で「Graciasは日本語で何というの?」と聞かれたので「ありがとうです」というと、「アリガトウ!」と片言の日本語で見送られた。少なくとも、日本や日本人に対してよく思ってくれているような雰囲気を感じ、とても嬉しかった。人のエネルギーは人であり、疲労が吹っ飛んだ瞬間だった。

この後も、現地の人と関わる中で、日本人というだけで好意的に対応してもらえる時が多かった。のちに、その背景には、実は日系移民の方々の存在があったということを知ることとなった。

2 アルゼンチンにおける日系移民の歴史

アルゼンチンの日系移民の歴史は、20世紀初頭に始まる。この時期、多くの日本人が経済的な困難から将来の希望を求めて海外に移住することを選んだ。1930年代になると、日本人移民の数が増加した。家族を伴った移住が増え、移民コミュニティが形成された。戦後、多くの日系人が農業に力を入れ、特に果物や野菜の生産で成功した。現在、アルゼンチンの日系人の人口は約65,000人と推定されている（具体的な数は地域による）。実際にこちらに来て、日系移民一世の方々から当時の話を聞く機会も何度かあった。「沖縄での生活が厳しかった。夢をもって渡った」と希望をもって来亜したという方もいたが、こちらに来た当初「差別があった」「石を投げられた」という現実もあったようだ。しかし、勤勉で粘り強い働きぶりが徐々に認められていった。そして、現在では「日系」はアルゼンチンの発展に最も貢献したグループとして、アルゼンチン社会に認められている。このよ

うな、日系移民の方々の努力により、現在のアルゼンチン社会の中での日本人に対する信頼が徐々に確立されていったのだろう。

3 教育実践―総合的な学習の時間、修学旅行、学習発表会―

日系移民の先人が切り開いた歴史を知り、伝えていくことはとても意義があることだと考えた。そこで「総合的な学習の時間」「修学旅行」「学習発表会」において、日系移民について学び・発信することをテーマとした。

(1) 修学旅行の準備、導入

本校は2024年度5月に小5が6名、小6が2名、中学部が4名の計12名が在籍していた。この3学年で修学旅行を実施する。まず、修学旅行の準備を始める授業において「アルゼンチンの人は日本や日本人のことをどう思っているだろう?」という発問をした。児童生徒からは「美味しい(日本食が)、ステキ、いい、かしこい、すごい(アニメが)、おもしろい、イケメン、寿司、野球」などの意見があがった。出た意見について、聞いていくと、おおむね「アルゼンチン人からよく見られている」という印象があるとのことだった。

◆取り組みの流れ◆
5月22日(水)～修学旅行の準備開始
6月27日(木) 修学旅行1日目
6月28日(金) 修学旅行2日目
7月 5日(金)～学習発表会の準備開始
9月 7日(土)学習発表会

そこでここから2枚の写真を見せた。まず1枚目はブエノスアイレスの7月9日通り(Avenida 9 de Julio)にある、オベリスクの広場に人々が集まった写真だ。そこにはアルゼンチンの国旗と日本の国旗が合体したものや「ガンバレ日本! Fuerza Japón !私たちの心はみなさんとともにあります」と描いた横断幕を見せている人々が写っている。「これは何だと思う?」という問いに「東日本大震災の時に、アルゼンチンが応援してくれたのでは?」という答えが1名の児童から返ってきた。また、2枚目も同じ場所で、大勢の人々が集まって手を挙げている写真を紹介した。これも何だと思うか問うと、すぐに「ドラゴンボールの人が亡くなったときのです」という返答が返ってきた。こちらは2024年3月1日にドラゴンボールの作者である鳥山明氏が亡くなった際に、ブエノスアイレスのインフルエンサーが呼びかけ、人々がエールを送ってくれたときの写真である。

このように、アルゼンチンの人々が日本にエールを送ってくれたエピソードを紹介した。アルゼンチンと日本の関係を考えたあと、このような関係が作られた重要な要因の1つに「日系移民の人々の努力」があるという話に繋げた。そして、日系移民の歴史と、その努力を一通り紹介したのちに、この歴史を学び・発信するという今回の修学旅行の目的をおさえた。

(2) 修学旅行の訪問地

今回の修学旅行は2024年6月27日、28日に行われた。27日はエスコバル、28日はサンアントニオデアレコを訪れる。1日目の訪問地、エスコバルはブエノスアイレス市の北部50kmに位置し、「花の都」として知られている。毎年10月には「花祭り」が開催され、国内外からの新しい品種の展示やその品評会、エスコバル日本人会を含む地元団体によるカーネーションなどで飾った花車のパレードやミス花祭りコンクールが行われる。エスコバルは日系移民による花卉(かき)栽培が盛んな地である。ここには、日本庭園、日系介護施設「日亜荘」、また日系移民の子息が日本語を学ぶ「エスコバル日本語学園」がある。これらの施設の訪問を通して、日系移民の歴史や文化を学ぶ。2日目の訪問地、サンアントニオデアレコはエスタンシアと呼ばれる「大規模な農園」がたくさんある街である。こちらでは、美術館や農園の訪問を通して、アルゼンチンの遊牧民であるガウチョの歴史や文化を学ぶ。約1カ月の準備期間を経て、修学旅行当日を迎えた。次に「日亜荘」「エスコバル日本

語学園」での交流の様子を記述したい。

(3) 修学旅行での学び～日亜荘

修学旅行初日。エスコバルに到着したのち、すぐに日亜荘を訪問した。着いてあいさつを済ませると、日亜荘の方々からお茶や大判焼きなどのお菓子をいただき、歓迎をうけた。また、管理人の方から、施設の説明と、移民一世として来亜した際の話を伺った。児童生徒の振り返りには「来てすぐの時、日本が恋しくて泣いていたこともあった」という話が心に残っているという記述が多かった。一世の方の話を聞く機会は私自身も何度かあった。夢や希望をもって、2カ月ほどの船旅を経て、アルゼンチンに来るわけだが、やはり全くの異国の地で大変な思いをされた人ばかりだ。児童生徒もそんな話を生で聞くことで、当時の移民の方々の境遇を知ることができた。また、説明を受けたあとは、施設内を案内していただいた。入居者の方々の部屋や、居住スペースを見学した。案内から戻って、児童生徒と入居者の方々が一緒に花の工作に取り組んだ。花の都、エスコバルにちなんだ作品であるが、一緒に作業することを通して入居者の方々にも喜んでもらえたようだった。最後に、ソーラン節を披露し、交流を終えた。

遠く日本にルーツをもち、アルゼンチンに来て、日本に戻ることなく日亜荘で人生を全うしていく。入居者の方々はどんな気持ちで日々の生活を送っているのだろう。児童生徒にとって今回の出会いはどのようなものだったのだろう。日系移民の方々に触れる貴重な体験であったことは間違いない。

(4) 修学旅行での学び～エスコバル日本語学園

日本語学園を訪問すると、主任の先生と9名の日系の児童生徒が迎えてくれた。まず、施設の説明をしていただいた。歴代の児童生徒の写真を見たり、教室を見学したりした。そして、講堂で交流をした。まず、お互いの質問タイムでは、好きなアニメや日本食など生活に関する質問や、休み時間にしていることや学校で流行っていることなど、学校生活に関する質問など様々であった。私が一番驚いたのは、こちらの現地校では休み時間にサッカーなどの遊びが制限されているということだ。スペースがなかったり、危険であったりという理由で思いっきり遊べないといったような話をしていた。一方で好きなアニメなどの話になると、日本人学校の児童生徒もエスコバル日本語学園の児童生徒もお互いが知っているアニメの名前を挙げていた。やはり、子どもたちの好きなアニメは世界共通でその話題で距離を縮めることができるのだなと感じた。そして、またこちらでもソーラン節を披露した。その後、お互いの学校で流行っているレクを紹介しあった。

児童生徒の振り返りで印象に残っている言葉がある。それは、ある生徒がこちらの主任の先生に「(日本語学園で働く) やりがいは何ですか」という質問をしたときのことだ。主任の先生は「日本の文化や言葉を未来に伝えていきたい」と熱く語っていた。中学部の生徒はこの言葉が印象に残ったと書いていた。私も同感である。日系移民の方々はやはり世代が続くにつれて、徐々に文化の継承などが薄れていく側面がある。しかし、このような情熱をもって、教育活動に取り組む先生がいるということに心を打たれたし、自分も頑張ろうという気持ちになった。

このような活動を経て、修学旅行1日目は終了した。1日目の2つの交流活動を通して、日系移民の方々の過去の努力の話から、現在文化の継承に勤しむ方の話まで、過去から現在、そして未来のことを考えることができた。2日目の訪問地は、日系移民関連ではないので、ここでは割愛する。

(5) 学習発表会へむけて

修学旅行から帰ったのち、7月5日 (金) の総合の時間より、学習発表会へむけた準備をスタートさせた。ここからは3班 (1班4名) に分かれて、それぞれの発表を創りあげていく。この中で、「日系移民に関すること」

をテーマにしているグループ名、NK（ニッケイを省略したもの）に関する記録を記述する。

最初の活動として、それぞれの班が発表を行う目的に沿って、どんな内容を伝えることができるかをマインドマップで書き出した。例えば、NKは「日系移民のことを知ってもらうため」であるので、それに関する修学旅行で学んだことを書き出した。頭の中にある、今まで日系移民について学んだこと、修学旅行で経験したこと、それらのことを班のメンバーでドンドンあげていく。そして、出た具体的な言葉を抽象的な枠組みで分類すると、主に、「日系移民の歴史」「エスコバル日本語学園について」「日亜荘について」「修学旅行で体験したこと」の4つにわけることができた。それぞれの担当を決めて、まとめの作業に入っていくこととなった。その際に、どのような発表の方法をとるのかも書き出した。出た意見としては、「劇、クイズ、コント、スライド」などである。おおむねの方向性としては、スライドで発表しながら、途中でクイズや寸劇を入れることとなった。また、全体のコンセプトとして、テレビゲーム風にまとめていくということも決まった。さて、あとは各自がそれぞれの学びをアウトプットし、4人の学びを繋げて、1つの作品を作るだけだ。

(6) 学習発表会

いよいよ9月7日（土）を迎えた。NKの発表、タイトルは「NK　日系移民～過去・現在・未来へ」である。導入は、学校が終わって家に帰りゲームをつけたら「このゲームは…日系移民のことを学んだ4人の物語である」というナレーションが流れ、プレゼンがスタートするといったものだ。そして、最初はアルゼンチンの日系移民の歴史を紹介した。先述したような困難な環境の中、努力することでアルゼンチン社会に認められていったという内容である。その中には日亜荘で移民一世の方から伺った「最初のころは寂しくて、日本が夢に出てきた」というエピソードも伝えた。また、スライドには某人気ゲームのような背景やキャラクター、効果音を用いた。この中で、日系移民の方々がアルゼンチンの農地を開拓していくところを寸劇で表現した。

そして、話は過去から現在へうつる。修学旅行で訪問した、日亜荘、エスコバル日本語学園の施設の紹介や、そこで経験したことを伝えた。日亜荘で行った工作についてのクイズを入れたり、エスコバル日本語学園でのマルコポーロのレクを寸劇にしたりした。そして、最後はエスコバル日本語学園の主任の先生の「日本の文化や言葉を未来に伝えていきたい」という言葉で締めくくった。そして、日系移民の方々の努力の歴史を知ったこと、自分もこれから日系移民の方々のように頑張りたい、というセリフでエンディングをむかえた。わずか10分という短い時間であったが、修学旅行の学び、日系移民の歴史や現在について、熱をこめて伝えることのできた作品となった。

4 おわりに

修学旅行の準備から、児童生徒とともに、日系移民について学びを深めることができた。現在、日本では少子高齢化の影響を受けて、外国人労働者の数が増加している。これから日本社会は一層、多文化共生への理解を高めていかなければならない。その際に、このアルゼンチン社会における日系移民の方々の存在は、私にとって新しい発見だった。アルゼンチンの中においての血の滲むような努力や勤勉さで、周囲からの尊敬を集めて、社会の中での日本人の地位が確立されるに至った。日本文化はアルゼンチン社会の中で、受け容れられ、お互いにリスペクトしながら共存しているように見える。もちろん、文化や言語の継承問題はいろいろあるにせよ、そのような居心地の良さを2年間という短い生活だったが、肌で感じた。

最後に、2年間で出会った日系移民の方々はとても素晴らしい方々ばかりだった。日本人の真面目さや繊細な部分と、アルゼンチン人の陽気でおおらかな部分が、混ざったような素敵な方が多かった。私も2年間アルゼン

チンに住み、アルゼンチン文化も学んだ身として、日本での生活や業務においても、このアルゼンチンでの感覚を忘れずに生活したい。その第一歩として、在任期間中に、ひょうたんのマテ（マテ茶を飲むための壺）を購入した。丁寧にケアしながら、ホッと一息つきたいときにマテ茶を飲んでいる。日本の生活リズムにのまれそうなときは、ゆっくりマテ茶を飲む時間を確保し、アルゼンチンを思い出し、世界をよくするために教育活動を続けたい。

現地の八百屋さんの夫婦と
いつも飲んでいたマテ茶